

論文

継続的「おこづかいちょう」を用いた小学生の金融経済教育

Continuous Financial Education with Pocketbook for Primary School Students

岐阜大学 大藪 千穂 Chiho Oyabu
兵庫教育大学連合大学院(院生) 小井戸 あや乃 Ayano Koido

キーワード

おこづかいちょう (pocketbook), 小学生 (primary school student), 金融経済教育 (financial education)

要旨

本研究では、筆者らが開発した子ども用の「おこづかいちょう」を用いて、小学6年生57人に11ヶ月間の記入実践を実施した。記入前後に、保護者と子どもにアンケートを実施し、「お金・買い物への関心」及び「非認知能力」に関する質問から、「おこづかいちょう」記入による児童への効果を分析した。この結果、「おこづかいちょう」記入により、児童に関しては、家族のことを考える行動が増え、お金や買い物、貯金に関心を高めることができた。保護者が小遣い制にすることに関心をもち、児童がお金に関心をもち、非認知能力である対処能力が高まったと自覚した。「おこづかいちょう」の長期の継続記入は、特に「対処能力」が高まる効果があることが明らかとなった。

I. はじめに

子どもの生活にもキャッシュレス化が浸透し始めている現在、子どもたちには、自分でお金を管理することができる能力、すなわち家計管理能力を身に付け、お金の価値について十分に理解する力が必要である。平成29年告示(令和2年度開始)の家庭科の学習指導要領解説(文部科学省, 2017)では、C内容「消費生活・環境」において、「買物の仕組みや消費者の役割」が新設され、より消費について理解が深まるように取り組むことが明記されている。物や金銭の大切さでは、家族のおかげで収入があること、収入に見合う支出が大切であることを学習する。学習指導要領解説には、内容(A 家族・家庭生活, B 衣食住の生活, C 消費生活・環境)間の連携学習を促しており、例えば調理実習や被服実習の材料の購入計画を立てたり、遠足・集団宿泊的行事などの学校行事と関連を図って学習したりすることなどが例示されている。

これまで小遣い帳に関する研究は、家庭雑誌等で頻繁に取り上げられてきたが、経済的実証研究ではほとんど見当たらない。一方、発達心理学の視点から、小遣いは基本的に親

の規範を内面化して使用されているとする報告(山本 1992)など、小遣い帳を記帳するように指導している親が少なく、放任傾向にあると結論づけている(田結庄 1992)。このような中、鶴藺らの「家庭の教育戦略としてのおこづかい」(2012)は、個票データを用いて全国小中学生データの計量分析を、教育戦略として初めて扱った社会学的研究であり、小中学生の小遣いの金額の規定要因と小中学生に与える影響について検証している。この結果、小遣いの額は、家庭の教育方針によって規定されること、また小遣いが子どもに与える効果は、小遣い以外の家庭教育のあり方によって異なることを導きだしている。この論文は、今後の小遣いの意味や効果に関する研究の基盤になると考えられるが、分析対象の期間が11月～12月にかけて1度のみ調査となっており、限定的な調査の結果であり、小遣いが影響をもたらす可能性のある他の従属変数には触れていない。松川ら(2018)は、金融リテラシーにおける非認知特性としての金融自己効力感(「自分にはお金をうまく貯めたり使ったりできる自信がある」の質問で判断)に注目している。お小遣いの与え方や管理の仕方、親子間の会話頻度(お金についての会話)が金融自己効力感に影響を与えると予想したが、有意な差を示さず、これらは金融自己効力感には関係がないと結論づけた。以上、小遣い帳や小遣いに関する研究は、緒に就いたばかりであり、さらなる研究が必要である。

先行研究では、小遣いの使い方や実態、金額設定が規定される要因や自己管理能力について分析されてきたが、本研究では、これらの研究の課題である、継続的小遣い帳の記入結果と、家庭教育の効果について、自己管理能力を含む子どもの非認知能力と保護者の意識にも焦点をあてて分析する。筆者らはこれまで、既存の子ども用の小遣い帳と家計簿アプリの分析を行い(梶浦・小井戸他 2020)、それらを参考に、授業などを通して継続的に記入することができ、お金の価値を理解できる新たな「おこづかいちょう」を、小学生用に開発した(梶浦・小井戸他 2020)。また開発した「おこづかいちょう」を1ヵ月間、小学5年生1クラス(29人)に実施した結果(小井戸・大藪・泉谷 2020)、お手伝いが増え、6割の児童が自分のお金の使い方や買い方の現状を把握しており、約3割の児童が現状を把握した上で、お金の使い方について見直し、考えるようになっていた。また、今後のお金の使い方に関する自由記述では、ほとんどの児童がお金の使い方(買い方)に言及したが、持続可能な買い物の仕方に言及した児童もいた。さらに別の小学5・6年生(110人)を対象に、1ヵ月間の「おこづかいちょう」の記入を実践した(小井戸・大藪・奥田 2021)。この調査では、保護者に対しても、記入前後にアンケートを実施し、保護者から見た子どもの変化から「おこづかいちょう」記入の教育的効果を「消費者教育の体系イメージマップ」(消費者庁 2013。以下「イメージマップ」と「非認知能力」から分析した。「非認知能力」(中室 2015)とは、自己意識、意欲、忍耐力、自制心、メタ認知ストラテジー、社会的適性、回復力と対処能力、創造性、性格的な特性を指す。

この結果、「おこづかいちょう」を記入することによって「お金への関心」が高まることが明らかとなった。また「お金に関心がある」「友達とよく遊ぶ」児童に対して教育的効果が見られた。さらに、お小遣いを渡している家庭の方が教育的効果に関わる変化が多く見られた。教育的効果の中でも、「イメージマップ」の「生活を設計・管理する能力」および「非認知能力」における「自制心」の高まりに関する変化があったことが明らかとなった。児童に対するアンケートでも、半数が「イメージマップ」や「非認知能力」に関する変化が生じたと自覚していた。このことから、「おこづかいちょう」を用いた実践によって、自

分のお金の使い方について、実践的かつ主体的に学ぶだけでなく、「非認知能力」の「自制心」も養うことができることが明らかとなった。

これら2つの短期間の調査で効果が見られたことから、本論文ではこの「おこづかいちょう」を用いて、約1年にわたる長期間の継続記入を実施し、それらの効果が継続するのか、あるいは新たな効果がみられるのかを分析することとした。また児童と保護者に対して毎月の「おこづかいちょう」記入後に先行研究(小井戸・大藪・奥田 2021)で用いたアンケートを実施することで、「おこづかいちょう」記入による児童の変化を分析する。そして開発した「おこづかいちょう」の長期間の記入により、家計管理能力の向上だけでなく、「非認知能力」に変化が見られるかを明らかにすることを目的としている。

II. 方法

2つの短期間の調査を経た上で、長期にわたる「おこづかいちょう」の記入分析を実施した。用いた「おこづかいちょう」は短期間の調査で用いたものと同じである。「おこづかいちょう」は、一般的なお小遣い帳の基本的な機能である、1週間分の「もらったお金」「使ったお金」「今持っているお金」の記入欄と月計に、親からの評価として「おうちの人からの一言」「週計」を加えている。また楽しく継続できるように「知識を付与できるクイズとシール」と、支出の可視化として、使った金額分を塗る、「ビンの塗り絵」を設定している。今後につなげることができることとしては、購入したものに対する振り返りの「今月のお金の使い方」「これから気を付けたいこと」を取り入れている。さらに新学習指導要領では内容間の連携学習を促していることから、本研究では「A 家族・家庭生活」の家庭での仕事と連携させた。5年生と6年生の家庭科では最初に、「A 家族・家庭生活」を学び、「家庭を支える仕事、自分が分担できる仕事、家事分担」を扱うことから、「おこづかいちょう」の中に「今週したおてつだい」の項目を入れた。また児童が達成感を実感できるように1週間で1枚記載する形式とし、1ヶ月で1冊の「おこづかいちょう」を作成し、担任が記入を促せるように、毎月新しい「おこづかいちょう」を配布した。作成した「おこづかいちょう」は、小学6年生の2クラス57人分(男子33人、女子24人)、計684冊である。記入期間は、当初は1年間の予定であったが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため2020年4月は学校が閉鎖になったことから、2020年5月～2021年3月までの11ヶ月間とした。なお対象とした小学校は、筆者の一人が勤務する国立大学教育学部の研修校の1つであり、文教地区に位置する比較的教育熱心な小学校である。

本研究では、「おこづかいちょう」を継続的につけることによって、消費生活に必要な実践的能力の向上だけでなく、非認知能力を高めることを目的としている(小井戸・大藪・奥田 2021)。これらを明らかにするために、児童に対して毎月の「おこづかいちょう」記入後に「お金・買い物への関心」と「非認知能力」(10項目)に関するアンケートを実施した。

「お金・買い物への関心」は、「お金に関心をもっている」と「よく一緒に買い物に行く」の2項目から聞いた。「非認知能力」の10項目として、事前に項目に該当する、お金や生活に関連する内容を洗い出し、質問が多くなると答えにくくなることから最も適すると考えられる1つを選択した。この結果、社会的適性及び協調性に関しては、「習い事をしている」と「よく友達と遊ぶ」、自己認識のやり抜く力は「貯金をしている」、意欲は「手伝いを自分からすすんでやる」、自制心は「ほしいものがあったても駄々をこねない」、対処能力

は「友達とケンカをするなどのトラブルがおこったとき、自らの力で解決しようとする」、創造性は「自分で考えて遊んでいる」、好奇心は「好奇心が強く、色々なものに興味を示す」の質問で尋ねた。また保護者に対しても保護者から見た児童の変化を明らかにした。さらに小遣いの現状(有無・頻度・金額)、お金に関する教育として望ましい場所、「お金・買い物への関心」及び児童と同じ「非認知能力」に関する質問(10項目)を尋ねた。そして毎月の児童の「おこづかいちょう」記入後、小遣いの現状(有無・頻度・金額)に加え、児童の変化と感想を自由記述で尋ねた。

Ⅲ. 結果

1. 小遣いの現状

保護者に小遣いの現状を尋ねた(表 1)。この結果、11カ月の平均では、69.2%の家庭が小遣いを渡している。

表 1 小遣いの現状

		該当数 (%)											
		5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
小遣いの有無	有	34(59.6)	37(64.9)	40(70.2)	40(70.2)	41(71.9)	41(71.9)	41(71.9)	41(71.9)	41(71.9)	40(70.2)	38(66.7)	39.5(69.2)
	無	22(38.6)	20(35.1)	17(29.8)	17(29.8)	16(28.1)	16(28.2)	16(28.3)	16(28.4)	16(28.5)	17(29.8)	19(33.3)	17.5(30.6)
	未記入	1(1.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.1(0.2)
	合計	57(100.0)	57(100.1)	57(100.2)	57(100.3)	57(100.4)	57(100.5)	57(100.6)	57(100.7)	57(100.8)	57(100.9)	57(100.10)	57(100.0)
小遣いの頻度	1週間に1回	5(8.8)	3(5.3)	3(5.3)	3(5.3)	3(5.3)	3(5.3)	3(5.3)	3(5.3)	3(5.3)	3(5.3)	5(8.8)	3.4(5.9)
	1ヶ月に1回	20(35.1)	23(40.4)	26(45.6)	25(43.9)	29(50.9)	29(50.9)	28(49.1)	28(49.1)	29(50.9)	29(50.9)	25(43.9)	26.5(46.4)
	不定期	5(8.8)	8(14.0)	9(15.8)	9(15.8)	7(12.3)	7(12.3)	8(14.0)	8(14.0)	7(12.3)	6(10.5)	5(8.8)	7.2(12.6)
	その他	4(7.0)	3(5.3)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	2.3(4.0)
	合計	34(59.6)	37(64.9)	40(70.2)	39(68.4)	41(71.9)	41(71.9)	41(71.9)	41(71.9)	41(71.9)	40(70.2)	37(64.9)	39.3(68.9)
小遣いの金額	なし	22(39.3)	20(35.1)	18(31.6)	18(31.6)	18(31.8)	20(35.1)	20(35.1)	19(33.3)	20(35.1)	21(36.8)	22(38.6)	19.8(34.8)
	50円	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.1(0.2)
	100円	4(7.1)	4(7.0)	4(7.0)	3(5.3)	3(5.3)	4(7.0)	3(5.3)	3(5.3)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	3.4(5.4)
	200円	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	2(3.5)	1.1(1.9)
	300円	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)
	500円	13(23.2)	14(24.6)	12(21.1)	13(22.8)	12(21.1)	10(17.5)	11(19.3)	11(19.3)	12(21.1)	12(21.1)	11(19.3)	11.9(20.9)
	600円	7(12.5)	7(12.3)	8(14.0)	7(12.3)	8(14.0)	8(14.0)	8(14.0)	8(14.0)	8(14.0)	8(14.0)	7(12.3)	7.6(13.4)
	700円	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.4)	1(1.5)	1(1.6)	1(1.7)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)
	1000円	5(8.9)	6(10.5)	7(12.3)	7(12.3)	9(15.8)	8(14.0)	8(14.0)	9(15.8)	8(14.0)	8(14.0)	9(15.8)	7.6(13.4)
	1500円	0(0.0)	0(0.0)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	0(0.0)	0(0.0)	0.6(1.1)
	2000円	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	0(0.0)	0.9(1.6)
	2500円	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.8)	0.1(0.2)
	4000円	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.1(0.2)
	その他	1(1.8)	2(3.5)	3(5.3)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	2(3.5)	1(1.8)	1.9(3.3)
	合計	56(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	56.9(99.8)

変化をみると、開始時は 59.6%が小遣いを渡していたが、徐々に増え、9月～1月は 71.9%が小遣いを渡すようになった。この研究以前から小遣いを定期的に渡していたのは 21 人であったが、本研究の 11カ月間の「おこづかいちょう」の記入により、小遣いを1カ月に1回定期的に渡す保護者が 14人増えた。終了時は 66.7%に減ったが、開始時より増加したことから、「おこづかいちょう」の継続記入によって保護者の意識に変化が生じた可能性があると考えられる。

次に小遣いを渡す頻度を見ると、1カ月に1回が全体を通じて最も多く、開始時は 35.1%であったが、徐々に増加し1月と2月には約5割となり、定期的に小遣いを渡すようになったことが伺える。小遣いの金額を尋ねたところ、500円が 20%と最も多かった。次いで600円(13.4%)と1000円(13.4%)であるが、開始時と終了時を比べると500円の人数が減り、1000円になった児童が増えた。

2. 「おこづかいちょう」の分析

児童の「おこづかいちょう」の「今週したおてつだい」「おうちの人からの一言」「毎月のお金の使い方」「これから気を付けたいこと」を分析した(表 2)。

表 2 「今週したおてつだい」「おうちの人からの一言」「毎月のお金の使い方」「これから気を付けたいこと」の内容

		該当数 (%)											平均
		5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
お手伝い	あり(複数含)	138(60.5)	160(70.2)	155(68.0)	185(81.1)	181(79.4)	202(88.6)	190(83.3)	201(88.2)	208(91.2)	207(90.8)	219(96.1)	186(84.5)
	未記入	86(37.7)	52(22.8)	56(24.6)	43(18.9)	39(17.1)	22(9.6)	34(14.9)	19(8.3)	16(7.0)	12(5.3)	9(3.9)	35.3(15.5)
	合計	228(100.0)	228(100.0)	228(100.0)	228(100.0)	228(100.0)	228(100.0)	228(100.0)	228(100.0)	228(100.0)	228(100.0)	228(100.0)	228(100.0)
おうちの人の一言	感謝	48(21.4)	43(20.3)	44(20.8)	28(12.3)	30(13.7)	19(8.5)	16(7.1)	16(7.3)	11(4.9)	15(6.8)	15(6.6)	25.9(11.4)
	提案・啓発	33(14.7)	21(9.9)	20(9.4)	13(5.7)	12(5.5)	8(3.6)	7(3.1)	5(2.3)	5(2.2)	4(1.8)	3(1.3)	11.9(5.2)
	確認・印鑑	30(13.4)	68(32.1)	55(25.9)	79(34.6)	55(25.1)	44(19.6)	52(23.2)	59(26.8)	60(26.8)	39(17.7)	46(20.2)	53.4(23.4)
	未記入	113(50.4)	80(37.7)	93(43.9)	108(47.4)	122(55.7)	153(68.3)	149(66.5)	140(66.1)	148(66.1)	162(73.6)	164(71.9)	130.2(57.1)
	合計	224(100.0)	212(100.0)	212(100.0)	228(100.0)	219(100.0)	224(100.0)	224(100.0)	220(100.0)	224(100.0)	220(100.0)	228(100.0)	221.4(97.1)
今月のお金の使い方	現状把握	24(42.1)	24(42.1)	34(59.6)	39(38.4)	38(66.7)	46(80.7)	41(71.9)	45(78.9)	45(78.9)	51(89.5)	53(93.0)	40(70.2)
	価値の内面化	5(8.8)	3(5.3)	2(3.5)	0(0.0)	2(3.5)	2(3.5)	7(12.3)	8(14.0)	10(17.5)	3(5.3)	4(7.0)	4.2(7.3)
	自己創造	1(1.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.2(0.3)
	未記入	27(47.4)	30(52.6)	21(36.8)	18(31.6)	17(29.8)	9(15.8)	9(15.8)	3(5.3)	2(3.5)	3(5.3)	0(0.0)	12.6(22.2)
	合計	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)
これから気を付けたいこと	お金	32(56.1)	25(43.9)	32(56.1)	37(64.9)	35(61.4)	46(74.2)	44(77.2)	43(75.4)	52(91.2)	51(91.1)	52(89.7)	40.8(71.0)
	暮らし	2(3.5)	1(1.8)	2(3.5)	1(1.8)	2(3.5)	8(12.9)	1(1.8)	11(19.3)	4(7.0)	2(3.6)	4(6.9)	3.5(6.0)
	未記入	23(40.4)	31(54.4)	23(40.4)	19(33.3)	20(35.1)	8(12.9)	12(21.1)	3(5.3)	1(1.8)	3(5.4)	2(3.4)	13.2(22.9)
	合計	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	62(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	57(100.0)	56(100.0)	58(100.0)	57.5(100.0)

注)「お手伝い」と「おうちの人からの一言」は複数回答である。

この結果、「今週したおてつだい」は、開始時は「あり」が 138 人(60.5%)、「未記入」が 86 人(37.7%)であったが、徐々に「未記入」が減少し終了時には 3.9%となり、終了時には 219 人(96.1%)がお手伝いをするまでに増加した。特に 8 月から 8 割に増加し、その後も持続した。これは夏休みになり、手伝いをする機会が増え、それが夏休み後も定着したからと考えられる。

次に「おこづかいちょう」の児童の記入に対する「おうちの人からの一言」の内容を「感謝」「提案・啓発」「確認・印鑑」「未記入」に分類した。この結果(表 2)、「未記入」が 57.1%と半数以上を占めたが、1 年間の変化を見ると、開始時は半数が「未記入」であったが、徐々に増加し、終了時には 71.9%となった。開始時、保護者の半数は何らかのコメントを記入していたが、時間の経過とともに徐々に記載が減少した。一方、次に多いのが「確認・印鑑」(23.4%)、「感謝」(11.4%)、「提案・啓発」(5.2%)である。1 年の推移を見ると、開始時は「感謝」(21.4%)の記載が多かったが、徐々に減少し終了時は 6.6%となった。「提案・啓発」(14.7%)も徐々に減少し、終了時は 1.3%まで減った。「おこづかいちょう」の記入が進むに従って、毎日の記載を負担に感じる保護者が増えたためと考えられる。

さらに児童には毎月の記入後に「今月のお金の使い方」についてコメントしてもらった。その内容を、人間発達度を示す「現状把握」「価値の内面化」「自己創造」「未記入」で分類した(大藪・杉原 2008)。この結果(表 2)、全体としては「現状把握」が 7 割と最も多く、次いで「価値の内面化」7.3%、「自己創造」0.3%、「未記入」22.2%であった。1 年間の経緯をみると、「現状把握」は開始時 4 割ほどで推移していたが、9 月から増加し、終了時は 9 割の内容が「現状把握」となった。「価値の内面化」の記述は、終了時には減少したが、11 月

から増加し、1月には17.5%となった。「自己創造」に関してはほとんど見られなかった。「未記入」については、開始時は半数近かったが、徐々に減少し、終了時はゼロとなり、全ての児童が何らかの感想を記入していた。以上より、「今月のお金の使い方」の内容は、「未記入」が徐々に減少し、「自己創造」に至る児童は少なかったが、数名は「価値の内面化」に関する内容まで考えることができ、継続的に記入することでほとんどの児童が「現状把握」できるようになった。

最後に「おこづかいちょう」をつけた結果、「これから気を付けたいこと」を毎月の記入後に記述してもらい、それらの内容を「お金」「暮らし」「未記入」に分類した。この結果(表2)、「お金」に関する内容が最も多く(71%)、次いで「未記入」(22.9%)、「暮らし」(6%)となった。「暮らし」は、開始時はほとんど該当するものはなかったが、徐々に「お手伝いをもっとする」「ものを買う時には、使い終わった時のことや、環境のことを考えて買っていきたい」などの記述が出てくるようになった。「お金」に関する内容をさらに、「現状」「使い方(買い方)」「貯金」に分類した。この結果、「使い方(買い方)」が最も多く(57.9%)、ついで「現状」(10%)、「貯金」(5.6%)となった。1年間の経緯を見ると、「お金」に関する記述は増加傾向を示し、終了時は8割～9割が該当した。貯金に関して最初は単に「貯金をしたい」という内容が多かったが、何のために貯金をしたいか、どのようにして貯金をするかなどのことにも言及していた。以上より、「おこづかいちょう」の記入を継続することで、お金や買い物の仕方、貯金に対して関心が高くなったと言える。

3. 児童に対するアンケート

児童がどのように自分自身を客観視しているかを知るために、「お金・買い物への関心」と「非認知能力」に関する質問を毎月の「おこづかいちょう」記入後に尋ねた。

表3 児童に対するアンケート

		該当数(割合)												平均	検定 ¹⁾
		5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
お金・買い物への関心	お金に関心をもっている	51(89.5)	49(86.0)	51(89.5)	49(86.0)	52(91.2)	50(87.7)	52(91.2)	50(87.7)	52(91.2)	48(84.2)	52(91.2)	50.5(88.7)	**	
	よく一緒に買い物に行く	36(63.2)	28(49.1)	26(45.6)	24(42.1)	23(40.4)	22(38.6)	22(38.6)	23(40.4)	20(35.1)	20(35.1)	24(42.1)	24.4(42.7)		
社会的適性及び協調性	習い事をしている	46(80.7)	48(84.2)	48(84.2)	48(84.2)	49(86.0)	49(86.0)	49(86.0)	50(87.7)	48(84.2)	47(82.5)	49(86.0)	48.2(84.7)		
	よく友達と遊ぶ	44(77.2)	46(80.7)	44(77.2)	43(75.4)	43(75.4)	39(68.4)	40(70.2)	43(75.4)	38(66.7)	38(66.7)	42(73.7)	42.1(73.8)		
自己認識のやり抜く力	貯金をしている	54(94.7)	56(98.2)	54(94.7)	55(96.5)	55(96.5)	53(93.0)	54(94.7)	55(96.5)	52(91.2)	53(93.0)	56(98.2)	54.3(95.2)		
非認知能力	意欲	手伝いを自分からすすんでやる	37(64.9)	32(56.1)	29(50.9)	29(50.9)	32(56.1)	31(54.4)	36(63.2)	32(56.1)	35(61.4)	27(47.4)	36(63.2)	32.4(56.8)	
	自制心	ほしいものがあったも駄々をこねない	51(89.5)	51(89.5)	51(89.5)	50(87.7)	49(86.0)	51(89.5)	51(89.5)	51(89.5)	50(87.7)	51(89.5)	49(86.0)	50.5(88.6)	
	対処能力	友達とケンカをするなどのトラブルがおこったとき、自らの力で解決しようとする	46(80.7)	45(78.9)	47(82.5)	46(80.7)	47(82.5)	46(80.7)	47(82.5)	48(84.2)	47(82.5)	45(78.9)	51(89.5)	7.5(83.3)	
	創造性	自分で考えて遊んでいる	56(98.2)	56(98.2)	54(94.7)	52(91.2)	55(96.5)	52(91.2)	53(93.0)	55(96.5)	52(91.2)	51(89.5)	52(91.2)	51.8(90.9)	
	好奇心	好奇心が強く、色々なものに興味を示す	40(70.2)	33(57.9)	36(63.2)	41(71.9)	41(71.9)	39(68.4)	39(68.4)	42(73.7)	43(75.4)	41(71.9)	43(75.4)	40.2(64.1)	

検定1):マクネマー検定 ***p<0.001,**p<0.01,*p<0.05 開始時5月と終了時3月の検定

この結果(表3)、平均値では、「貯金をしている」(95.2%)が最も高くなった。次いで「自分で考えて遊んでいる」(90.9%)、「お金に関心をもっている」(88.7%)、「ほしいものがあったも駄々をこねない」(88.6%)、「習い事をしている」(84.7%)、「友達とケンカをするなどのトラブルがおこったとき、自らの力で解決しようとする」(83.3%)で8割以上を示した。

多くの非認知能力で評価が高いことが分かる。「よく一緒に買い物に行く」のみ、開始時の5月と終了時の3月に有意差が見られた。月ごとの変化を見ると、多くの項目で2月は減少し、最終月の3月に増加する傾向が見られた。これは、「これが最後のアンケートです」と担任からの声かけがあったため、積極的に記入したのではないかと推測できる。ただし月ごとの変化は減少する月や増加する月があり、減少傾向や上昇傾向としてみることは難しかった。

「おうちの人からの一言」欄への記述の有無と教育的効果について分析をした。まず「おうちの人からの一言」の記述量によって、児童を次の3つのグループに分類した。①年間を通してほぼ全ての週・月で記述がある(10.5%)、②週・月によって記述にばらつきがある(68.4%)、③年間を通して一度も記述がない(21.0%)。毎月のアンケートにおいて親子間で回答内容が異なっていた項目数は、全110項目中、①グループの平均15.0項目、②グループの平均16.3項目、③グループの平均は20.0項目であったが、各グループで、教育的効果に有意差は見られなかった。

4. 保護者に対するアンケート

保護者に対しても「お金・買い物への関心」と「非認知能力」に関する質問を毎月の「おこづかいちょう」記入後に尋ねた。この結果(表4)、平均では、「自分で考えて遊んでいる」(97.9%)が最も高くなった。次いで「友達とケンカをするなどのトラブルがおこったとき、自らの力で解決しようとする」(89.8%)、「貯金をしている」(86.4%)、「お金に関心をもっている」(84.4%)、「ほしいものがあったても駄々をこねない」(83.9%)、「習い事をしている」(83.7%)が8割以上を示した。以下、「好奇心が強く、色々なものに興味を示す」(77.4%)、「よく友達と遊ぶ」(65.6%)、「手伝いを自分からすすんでやる」(61.6%)、「よく一緒に買い物に行く」(48.3%)は約半数が該当した。このように、児童と同様の傾向があったことから、児童の自覚と保護者の児童に対する認知には差がないことが分かる。

表4 保護者に対するアンケート

		5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均	検定 ¹⁾
お金・買い物への関心	お金に関心をもっている	44(77.2)	46(80.7)	47(82.5)	48(84.2)	49(86.0)	48(84.2)	49(86.0)	48(84.2)	49(86.0)	49(86.0)	52(91.2)	48.1(84.4)	**
	よく一緒に買い物に行く	35(61.4)	28(49.1)	28(49.1)	26(45.6)	25(43.9)	25(43.9)	27(47.4)	28(49.1)	24(42.1)	25(43.9)	32(56.1)	27.5(48.3)	
社会的適性及び協調性	習い事をしている	48(84.2)	48(84.2)	48(84.2)	48(84.2)	48(84.2)	48(84.2)	48(84.2)	48(84.2)	47(82.5)	47(82.5)	47(82.5)	47.7(83.7)	
	よく友達と遊ぶ	39(68.4)	42(73.7)	42(73.7)	42(73.7)	42(73.7)	40(70.2)	40(70.2)	40(70.2)	40(70.2)	39(68.4)	35(61.4)	37.4(65.6)	
自己認識のやり抜く力	貯金をしている	47(82.5)	48(84.2)	48(84.2)	49(86.0)	49(86.0)	49(86.0)	49(86.0)	49(86.0)	51(89.5)	52(91.2)	51(89.5)	49.3(86.4)	
非認知能力	意欲	手伝いを自分からすすんでやる	37(64.9)	38(66.7)	35(61.4)	35(61.4)	35(61.4)	36(63.2)	35(61.4)	36(63.2)	34(59.6)	30(52.6)	35.1(61.6)	
対処能力	自制心	ほしいものがあったても駄々をこねない	47(80.7)	48(84.2)	48(84.2)	48(84.2)	48(84.2)	49(86.0)	48(84.2)	47(82.5)	49(86.0)	48(84.2)	47(82.5)	9.2(83.9)
	友達とケンカをするなどのトラブルがおこったとき、自らの力で解決しようとする	45(78.9)	49(86.0)	51(89.5)	52(91.2)	53(93.0)	53(93.0)	53(93.0)	52(91.2)	53(93.0)	53(93.0)	49(86.0)	51.2(89.8)	
創造性	自分で考えて遊んでいる	56(98.2)	57(100.0)	56(98.2)	56(98.2)	56(98.2)	56(98.2)	56(98.2)	55(96.5)	56(98.2)	56(98.2)	54(94.7)	55.8(97.9)	
好奇心	好奇心が強く、色々なものに興味を示す	45(78.9)	44(77.2)	44(77.2)	45(78.9)	44(77.2)	44(77.2)	44(77.2)	43(75.4)	44(77.2)	44(77.2)	44(77.2)	44.1(77.4)	

1年間の推移を見た結果、児童の結果と同様、最も変動しているのが「よく一緒に買い物に行く」である。これは新型コロナウイルス感染症の拡大により、様々な店舗で入場制限がされるようになったため、保護者だけで買い物をすることが多くなったことが一因と

して考えられる。他の項目に関しては、月ごとに上下するが、最終月の3月に減少する項目と増加する項目、変化しない項目の3パターンに分類できる。「自分で考えて遊んでいる」「よく友達と遊ぶ」「手伝いを自分からすすんでやる」「よく一緒に買い物に行く」は減少傾向にあり、「友達とケンカをするなどのトラブルがおこったとき、自らの力で解決しようとする」「貯金をしている」「お金に関心をもっている」は増加傾向にある。遊びや買い物など外出に関わる項目は、児童のアンケートと同様、新型コロナウイルス感染症の影響で減少傾向を示したと考えられる。「おこづかいちょう」記入開始時の5月と終了時の3月で「お金に関心をもっている」でのみ有意差が見られたが、継続的に「おこづかいちょう」の記入をすることにより、保護者は開始時である5月の認識に比べると、他の月は児童が関心を持っていると感じる割合が高くなったと考えられる。3月に数値が9割を占めたことの理由は記述がなかったため不明であるが、最後の「おこづかいちょう」という意識が、1年間の児童の行動を見直すきっかけになったと推測できる。

次に毎月の「おこづかいちょう」記入後、保護者に児童の変化と感想を自由記述で尋ね、その内容を「非認知能力」と「イメージマップ」の内容別に分類した(表5)。

表5 保護者の自由記述内容分析

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
	該当数 (%)											
記載なし	31(44.3)	47(78.3)	45(70.3)	52(88.1)	48(72.7)	53(89.8)	54(94.7)	55(94.8)	53(91.4)	55(93.2)	25(36.2)	86.3(77.7)
非認知能力	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
社会的適性及び協調性	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
自己認識のやり抜く力	1(1.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.2(0.1)
意欲	0(0.0)	0(0.0)	1(1.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.2(0.1)
自制心	6(8.6)	1(1.7)	6(9.4)	2(3.4)	5(7.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.7)	1(1.7)	7(10.1)	4.8(4.0)
対処能力	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
創造性	0(0.0)	1(1.7)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.3(0.3)
好奇心	1(1.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.2(0.1)
イメージマップ	1(1.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.2(0.1)
消費が持つ影響力の理解	1(1.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.2(0.1)
持続可能な消費の実践	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.2(0.2)
消費者の参画・協働	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
商品安全の理解と危険を回避する能力	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
トラブル対応能力	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
選択し、契約することへの理解と考える態度	4(5.7)	2(3.3)	4(6.3)	1(1.7)	6(9.1)	3(5.1)	0(0.0)	1(1.7)	1(1.7)	0(0.0)	5(7.2)	4.5(3.8)
生活を設計・管理する能力	12(17.1)	5(8.3)	5(7.8)	2(3.4)	5(7.6)	2(3.4)	1(1.8)	1(1.7)	0(0.0)	1(1.7)	18(26.1)	8.7(7.2)
情報の収集・処理・発信能力	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
情報社会のルールや情報モラルの理解	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
消費生活情報に対する批判的思考力	0(0.0)	1(1.7)	1(1.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(2.9)	0.7(0.6)
その他	14(20.0)	3(5.0)	2(3.1)	2(3.4)	1(1.5)	0(0.0)	2(3.5)	1(1.7)	3(5.2)	2(3.4)	12(17.4)	7(5.8)
合計	70(100.0)	60(100.0)	64(100.0)	59(100.0)	66(100.0)	59(100.0)	57(100.0)	58(100.0)	58(100.0)	59(100.0)	69(100.0)	61.7

注1) 複数の能力や内容と関連付けられた記述は複数カウントしている。

この結果、「記載なし」が7割以上と最も多くなった。5月(44.3%)と3月(36.2%)は記載なしの割合が低く、調査の最初と最後であるため保護者の記入意識が高かったと考えられる。「非認知能力」の中では「自制心」に関する記載が最も多く(4%)、10月から12月までの3ヶ月以外は「自制心」に関する記載があった。「本当に必要なものかどうか考えて買い物をするようになった」「お金を使うことに慎重になり、少しでも多くお金を残すという意識が芽生えた」などの記載があり、最終月の3月には1割を示したのは、1年間を通してみると、「自制心」がついたと感じたからと考えられる。「社会的適性及び協調性」「自己認識のやり抜く力」「意欲」「対処能力」「創造性」「好奇心」に関する記載はほとんど見られなかった。一方、「イメージマップ」における「生活を設計・管理する能力」(7.2%)と「選択し、契約することへの理解と考える態度」(3.8%)の記載内容に該当者がいた。1年間の推移を見ると、「記載なし」は、開始時は4割程度であったが、その後多くなり、終了間近

の2月には9割以上となった。しかし最終時には36.2%に下がり記述が増加した。この傾向は、他の項目においても同様である。特に「生活を設計・管理する能力」については、終了時に26.1%となったことから、1年間を通してみると、「おこづかいちょう」の記入は、生活設計と管理能力と関係すると保護者が感じたことが分かる。しかし「記載なし」が増加したことから保護者にとって記載を続けることが難しいことがわかる。金融経済教育をどこで実施するのがよいかを尋ねた結果、87.7%の保護者は「家庭」と回答していた。一方、自由記述から、「忙しくておこづかいちょうをつける時間がない」と記載している保護者もいることから、忙しい中でも、児童に対する金融経済教育に継続して関わりを持ち続けられる工夫が保護者に対しても必要である。

約1年間の「おこづかいちょう」記入の実践を行い、保護者と児童の評価を比較した結果(表6)、多くの月で「貯金をしている」の項目で有意差が見られた。これは児童が貯金をしていることを、保護者が知らないと読み取ることもできる。6月に「好奇心が強く色々なものに興味を示す」で有意差があった以外は、有意差は見られなかったため、保護者と児童の意識には差がないと言える。

表6 保護者と子どものアンケート

アンケート項目		5月			6月			7月			8月			9月		
		保護者	児童	検定	保護者	児童	検定	保護者	児童	検定	保護者	児童	検定	保護者	児童	検定
お金・買い物への関心	お金に関心を持っている	44(77.2)	51(89.5)		46(80.7)	49(86.0)		47(82.5)	51(89.5)		48(84.2)	49(86.0)		49(86.0)	52(91.2)	
	よく一緒に買い物に行く	35(61.4)	36(63.2)		28(49.1)	28(49.1)		28(49.1)	26(45.6)		26(45.6)	24(42.1)		25(43.9)	23(40.4)	
社会的適性及び協調性	習い事をしている	48(84.2)	46(80.7)		48(84.2)	48(84.2)		48(84.2)	48(84.2)		48(84.2)	48(84.2)		48(84.2)	49(86.0)	
	よく友達と遊ぶ	39(68.4)	44(77.2)		42(73.7)	46(80.7)		42(73.7)	44(77.2)		42(73.7)	43(75.4)		42(73.7)	43(75.4)	
非認知能力	自己認識のやり抜く力	47(82.5)	54(94.7)	*	48(84.2)	56(98.2)	**	48(84.2)	54(94.7)		49(86.0)	55(96.5)	*	49(86.0)	55(96.5)	*
	意欲	37(64.9)	37(64.9)		38(66.7)	32(56.1)		35(61.4)	29(50.9)		35(61.4)	29(50.9)		35(61.4)	32(56.1)	
自制心	ほしいものがあったも駄々をこねない	46(80.7)	51(89.5)		48(84.2)	51(89.5)		48(84.2)	51(89.5)		48(84.2)	50(87.7)		48(84.2)	49(86.0)	
	対処能力	45(78.9)	46(80.7)		49(86.0)	45(78.9)		51(89.5)	47(82.5)		52(91.2)	46(80.7)		53(93.0)	47(82.5)	
創造性	自分で考えて遊んでいる	56(98.2)	56(98.2)		57(100.0)	56(98.2)		56(98.2)	54(94.7)		56(98.2)	52(91.2)		56(98.2)	55(96.5)	
	好奇心	45(78.9)	40(70.2)		44(77.2)	33(57.9)	*	44(77.2)	36(63.2)		45(78.9)	41(71.9)		44(77.2)	41(71.9)	

10月			11月			12月			1月			2月			3月		
保護者	児童	検定	保護者	児童	検定	保護者	児童	検定	保護者	児童	検定	保護者	児童	検定	保護者	児童	検定
48(84.2)	50(87.7)		49(86.0)	52(91.2)		48(84.2)	50(87.7)		49(86.0)	52(91.2)		49(86.0)	48(84.2)		52(91.2)	52(91.2)	
25(43.9)	22(38.6)		27(47.4)	22(38.6)		28(49.1)	23(40.4)		24(42.1)	20(35.1)		25(43.9)	20(35.1)		32(56.1)	24(42.1)	
48(84.2)	49(86.0)		48(84.2)	49(86.0)		48(84.2)	50(87.7)		47(82.5)	48(84.2)		47(82.5)	47(82.5)		47(82.5)	49(86.0)	
40(70.2)	39(68.4)		40(70.2)	40(70.2)		40(70.2)	43(75.4)		40(70.2)	38(66.7)		39(68.4)	38(66.7)		35(61.4)	42(73.7)	
49(86.0)	53(93.0)		49(86.0)	54(94.7)		49(86.0)	55(96.5)	*	51(89.5)	52(91.2)		52(91.2)	53(93.0)		51(89.5)	56(98.2)	
35(61.4)	31(54.4)		36(63.2)	36(63.2)		35(61.4)	32(56.1)		36(63.2)	35(61.4)		34(59.6)	27(47.4)		30(52.6)	36(63.2)	
49(86.0)	51(89.5)		48(84.2)	51(89.5)		47(82.5)	51(89.5)		49(86.0)	50(87.7)		48(84.2)	51(89.5)		47(82.5)	49(86.0)	
53(93.0)	46(80.7)		53(93.0)	47(82.5)		52(91.2)	48(84.2)		53(93.0)	47(82.5)		53(93.0)	45(78.9)		49(86.0)	51(89.5)	
56(98.2)	52(91.2)		56(98.2)	53(93.0)		55(96.5)	55(96.5)		56(98.2)	52(91.2)		56(98.2)	51(89.5)		54(94.7)	52(91.2)	
44(77.2)	39(68.4)		44(77.2)	39(68.4)		43(75.4)	42(73.7)		44(77.2)	43(75.4)		44(77.2)	41(71.9)		44(77.2)	43(75.4)	

検定 *** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05

IV. 考察

先行研究(小井戸・大藪・泉谷 2020, 小井戸・大藪・奥田 2021)では、1ヵ月の「おこづかいちょう」の記入によって、現状把握、お金の使い方や買い方の見直し、お金への関心の高まり、児童に意識の変化が見られた。また生活を設計・管理する能力および自制心が高まることが明らかとなった。本論文では、開発した「おこづかいちょう」を用いて、小学6年生57人を対象に11ヵ月間の長期にわたる継続記入、児童に対する記入後のアンケート、「おこづかいちょう」記入後の保護者に対するアンケートによって、「おこづかいち

よう」の継続記入による金融経済教育の効果を分析した。この結果、児童は手伝いの回数が増加し、お金の使い方について「現状把握」ができる割合が増加し、お金や買い物、貯金に対して関心が高くなった。また児童の自分自身に対する見方については、友達との遊びは、減少傾向を示したが、様々なものに関心をもつ割合が上昇した。また「友達とケンカをするなどのトラブルがおこったとき、自らの力で解決しようとする」の項目で増加傾向を示した。「よく一緒に買い物に行く」のみ5月と3月で有意差が見られた。

一方、保護者は、この研究以前から小遣いを定期的に渡していたのは21人であったが、本研究の11ヵ月間の「おこづかいちょう」の記入により、小遣いを1ヵ月に1回定期的に渡す保護者が14人増えたことから、「おこづかいちょう」の記入の効果を保護者が実感したことが分かる。また児童がお金に関心をもつようになり、自己認識、やり抜く力が高まったと感じていることがわかった。ただ手伝いに関して、児童は回数が増えていたが、保護者は減少したと感じていた。「おこづかいちょう」の継続記入については、「生活設計と管理能力」と関係すると感じている。「自制心」に関しても少数ではあるが該当した。「おこづかいちょう」記入開始時の5月と終了時の3月で「お金に関心をもっている」で有意差が見られたことから、児童のお金への関心が高くなったと保護者が評価したことが分かる。また保護者と児童の評価を比較した結果、多くの月で「貯金をしている」以外はほとんど有意差がなかったことから、保護者と児童の意識には差がないことが明らかとなった。以上より、お金への関心、生活設計と管理能力、自制心の高まりがあった1ヵ月の短期の時とほぼ同じ効果が、長期にわたる「おこづかいちょう」の記入においても持続することが分かった。また継続記入することで、現状把握する能力や「非認知能力」が高まった。さらに小遣いを渡す保護者の増加があり、保護者も小遣いを用いた金融経済教育の効果を実感したと言える。

ただし、今回の非認知能力を測定する具体的調査項目の妥当性については再度検討する余地が残されている。アンケート項目が多くなると、毎月実施することから回答する意欲がなくなるのではないかと考え、それぞれ1つの質問に設定したが、質問自体の妥当性について検討をし、数個の質問項目が必要なところは設定の変更をしていきたい。

参考文献

- 大藪千穂・杉原利治(2008)「人間発達プロセスを基盤とした「人生設計ゲーム」開発の試み」『消費者教育』第28号, pp.95-105
- 梶浦玲奈・小井戸あや乃・泉谷徹・大藪千穂(2020)「子どもためのおこづかいちょうの開発」『中部消費者教育論集』第16号, pp.39-52
- 小井戸あや乃・泉谷徹・大藪千穂(2020)「小学生を対象とした『おこづかいちょう』を用いた消費者教育」『中部消費者教育論集』第16号, pp.53-63
- 小井戸あや乃・大藪千穂・奥田真之(2021)『『おこづかいちょう』を用いた小学生に対する金融経済教育』『生活経済学研究』第53巻, pp.1-14
- 金融経済教育推進会議(2014)「金融リテラシー・マップ『最低限身に付けるべき金融リテラシー(お金の知識・判断力)』の項目別・年齢層別スタンダード」
- 金融広報中央委員会(2015)「子どものお金と暮らしに関する調査第三回」

- https://www.shiruporuto.jp/public/data/survey/kodomo_chosa/2015/(2020年3月6日参照)
- 消費者庁(2013)「消費者教育の体系イメージマップ」, 消費者教育推進のための体系的プログラム研究会, <https://www.kportal.caa.go.jp/search/pdf/imagemap.pdf>(2021年9月25日参照)
- 田結庄順子・柳昌子・吉原崇恵・中屋紀子・牧野カツコ(1992)「児童・生徒・大学生の消費実態と学校における消費者教育の今後の課題に関する研究(第1報)ー研究枠組と基本的属性および児童・生徒の場合」『日本家政学会誌』第43巻8号, pp.813-825
- 鶴藺佳菜子・山口泰史・鈴木翔・武田真梨子・須藤康介(2012)「家庭の教育戦略としてのおこづかいー全国小中学生データの計量分析ー」東京大学大学院教育学研究科紀要, 第52巻, pp.157-167
- 中室牧子(2015)『「学力」の経済学』, 株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 松川誠一・関口陽介・秋山和子(2018)「小学6年生の金融自己効力感とそれを規定する諸要因」『経済社会学会年報』第40巻, pp.141-155
- 文部科学省(2016), 「生きる力」, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/pamphlet/__icsFiles/afieldfile/2011/07/26/1234786_1.pdf(2020年1月21日参照)
- 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 家庭編」, P69-70
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_009.pdf (2020年1月21日参照)
- 文部科学省(2017)新しい学習指導要領の考え方ー中央教育審議会における議論から改訂そして実施へー
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
(2020年1月21日参照)
- 山本登志哉(1992)「小学生とお小遣いー『お金』・『物霊』・『僕のもの』」『発達』51号, pp.68-76